

『太平記』研究史稿 (2)

— 戦後の研究の出発 永積安明氏の論を軸に —

大森北義

はじめに

戦後の『太平記』研究は、永積安明氏が著わした『続日本古典読本 太平記』(日本評論社、昭23・10)から始まった。永積氏は、その「はじめに」で、戦前戦中の時期を振り返って次のようにいう。「南北朝」という言葉さえ禁じられており、『太平記』について「ひとつ動かすことのできないかのような常識」があつたし、それを「うちやぶ」つて「批判的な研究をすすめ」「公表する」となど、「不可能な状態が長い間つづいて来た」⁽¹⁾。したがつて、戦後の「今こそ」、それまで積みかさねられてきた「おもおもしい『太平記』観と対決」し、

太平記をはじめて根本的に自由に論じ、あのおそるべき伝説的な「権威」をかさに、のさばつていた常識をつきやぶることもできる。と。そして、「戦争中の学者や評論家たち」が「説明し」、また、「教えて来た『太平記』の本質」に対して、「自分自身の太平記論を書かねばならぬ」とその決意を語った。

永積氏のこうした一種瑞々しい心意気に支えられて本書は著わされた。本文篇と研究篇から成り、研究篇は「太平記序説」とされた。

その内容は、『太平記』の「成立、構想、批評精神、表現」についての考察であったが、それをベースに、その後、永積氏は「歴史文学の評価について——平家物語と太平記——」(「文学」、昭26・10)を書き、さらに「太平記論」(「文学」、昭31・9)を書いた⁽²⁾。『太平記』世界についての論理的で、しかも構造的な考察であったから、この永積論は戦後の『太平記』論の一つの中核となつて、大きな影響力をもつた。後に、長谷川端氏は、

永積論文が与えた影響は大きく、その後の研究はこの論文を超えることを目標にしたといつてもあながち過言ではない。
と述べた(「参考文献解説」、『鑑賞日本の古典 太平記』所収、昭55・10)。戦後の『太平記』研究においてそれほどにも大きな位置を占めた永積論について、他氏による批判も含めて、ここで研究史的に整理しておきたい。

1

計画から「公家政治の一時的で形式的な制覇まで」を描き、第二部（巻十三～二十一）は、「足利氏を中心とする武家政治の再建と勝利」、ならびに「公家方の徹底的な敗北」を描く。そして、第三部（欠巻）の後、巻二十三～四〇）は、「初期足利将軍を中心とする武家の消長」から、義満が「三代将軍の地位につくまで」である、と。手短な叙述であるが、ここに永積氏の『太平記』觀が語られている。それまでの『太平記』觀は、多く、たとえば次のようなものであつた。

本書は、文保二年後醍醐天皇御治政の始めから、後村上天皇の正平二十二年まで、凡そ五十余年間の戦乱記である⁽³⁾。その特徴は、天皇を軸に『太平記』の歴史と物語を把握しようとするところにあるが、戦前からの『太平記』觀が多かれ少なかれそうであり、それも「ひとつの動かすことのできない常識」であつたのだが、それらと明確に違う『太平記』觀を永積氏はここで意識的に打ち出した。すなわち、第一部世界の天皇政権の復活を「一時的なものとみなし、その後の第二部世界で、天皇の政権は「徹底的に「敗北」したと捉える。そして、第二部は「義満が三代将軍の地位につくまで」の武家政権確立の過程と捉えるのである⁽⁴⁾。

2

では、永積氏の『太平記』論の内容を具体的に見てみよう。

永積氏は、まず、「太平記の成立」事情に注意をむける。従来の成立論をふまえ、玄惠・直義在世中の「原太平記」に、武家方の視点から「書入」や「書継」がなされて四十巻本が成ったとする。こうした『太平記』固有の生成事情をふまえて、次に作者の立場を論じ、第一・二部が「宮方に心をよせ」る者のそれであり、第三部は

「足利・武家方に同感」するもので、その立場は相互に「対立的」でさえあるとした。そして、作者の立場が「宮方」から「武家方」へと移動したことで、作品に「矛盾・不統一」が生じ、文学的には「破綻」したと論じた。永積氏の『太平記』論は、こうした構造を基本にして展開する。

「矛盾・不統一」をみせながらも、しかし、現行の『太平記』は「いちおう統一的に整理され、とにかくひとつ全体を形づくっている」。では、その「構想」はどのようであるか。それについては、作者の「世界觀」「歴史觀」に注目すべきであるとして、「北野通夜物語」・「雲景未来記」・「序」を検討する。「北野通夜物語」については「政治道德論あるいは仏教的な因果説」によって「現実の発展」を「解釈」したが、それで現実を「おおいつくす」とはできなかつた。しかし、それによつて、現実を「ひややかに」でも「容認」しえたことは、『太平記』作者の歴史觀のひとつ重要な側面であると論じた。

また、「雲景未来記」では、「王法は平家の末より尽き」「武運ならでは立つまじかりし」という認識があることに注目して、「古代天皇制」が「没落」し「中世の形成」が「自覺的に打ち出され」といふと指摘し、そこに、「太平記の歴史文学としての」「確かさ」がある、と評価した。さらに、「支那風の政治道德論」であるとする「序」は、次のように認定した。

太平記全構想の大小の波動・起伏の動因として、作者が半世紀にわたる歴史の整理のためにたえず用意して用いつづけた基本的な世界觀として、誰も否定することはできないものである。しかし、この「世界觀」の文学的意義について永積氏は、

このような世界觀は、何も太平記にかぎらずあらゆる中世文学

が、多かれ少なかれ持ちつづけて来たところであり、問題は太平記が、かかる中世的な常識からどれだけつきぬけることができたか、あるいはできなかつたかにかかっている。

しかもそのことが太平記の全構想を通じて、物語文学あるいは歴史文学としての太平記と、いわばその芸術性とどのように交流したかに、われわれの課題の中心はあるだろう。

つまり、その「基本的な世界観」は「中世的な常識」であったと認定し、『太平記』の「芸術性」（文学的達成度）は、その「常識」を「どれだけつきぬけた」かにかかっているという。——しかし、『太平記』が自ら「基本的な世界観」としたその思想を「つきぬけ」るとはどういうことであろうか。そうした「つきぬけ」が論理的に、あるいは現実的に可能なことであるかどうか。永積氏のこの論理は“難解”である。

しかし、永積氏は、この“難解”な論理を方法として『太平記』の文学的な質を解明しようとするが、つづいて次のように述べて、新たな論点を設定する。

太平記作者のしめくろうと試みたものは何か。歴史文学としての太平記がとらえようとしたものは客観的にはどのようなものであったか。それをどんなに解釈し方向づけ處理しようとしたか。太平記の構想の基本的な課題はまた、けつきよくのところこの点の究明にあるだろう。

「歴史文学としての太平記がとらえようとしたもの」とは、『太平記』が“その時代”的“何を、どう描いたか”ということであるが、それについて永積氏は、次のように論じる。その論理をたどりながら要点をいえば、

原太平記の作者は、「宮方深重のもの」の立場から、複雑で分裂をきわめた対立期を、古代的な旧貴族の復活の過程としてとらえた。

したがつて太平記の第一部、卷十二までは、宮方を指導者とする北条氏の撃滅を中心とし、卷十二の「公家一統政道の事」に太平の結論を見出している。

しかし、同じように「宮方深重」の立場になると思われる第二部世界の卷々は、宮方の正成・義貞・顕家等のみじめな敗北、後醍醐天皇や旧貴族の没落を叙述している。この事実は、宮方の王政復古を中心とする太平記の太平謳歌を不可能にしている。このことは、現実の発展が原太平記の構想したであろうところのものを、ひややかに否定するものであり、「宮方深重」の立場にたつかぎり、構想の破綻はどうすることもできなかつた。

「そこで太平記作者は、ひとつの構想を統一的なまとまりのうちに矛盾なくおさめるためには事実を無視しなければならず、現実の導きのままに筆をすすめるためには『宮方深重』の立場につきあたる結果をどうすることもできなかつた」。

「太平記前半の構想が根本的には『宮方深重のもの』の立場にありながら、個々の事件・個々の人物行動に対しても、宮方に対して反省的であり、批判的でさえあることは、後半の増訂者の加筆の問題にもかかわるけれども、歴史文学として上に見た矛盾をきりぬけるための、敗北であると同時に勝利の道でもあつた」。

太平記の後半は、武家方に近いものの立場から描かれる。そして、形式的には南北朝の争いとして捉えているが、歴史叙述の実質は、将軍の世における大名たちの対立として構図はくりひ

ろげられる。

(8) 太平記のとらえようとした時代そのものが、統一を欠いたばらばらの対立時代であり、混乱の連續であった。「このような混沌のなかに立ち入り、それを統一的な方向に整理するためには、

作者の立場はけつして幸いでなかつた。『宮方深重』の立場を、

もしおしとおすことができたとすれば、おそらく原太平記に想像されるように、その構想はいちおう形式的には破綻のない統一的なものとなりえたかも知れない。しかしそれはけつして、

歴史文学としての太平記を豊かにする手段ではなく、形式的な整備とともに内容的な空虚を約束するものでしかありえなかつたであろう」。

(9) (10) 太平記の構想が壮大であるにもかかわらず、その広がりのすすみに反比例して、統一が散漫になつたことは認めなければならない。それは、主題の不統一、文学的な失敗作として、『平家物語』と対照的でさえある。

最初に述べた因果観あるいは政治道徳説による解釈も、ここでは発展し分裂する事実を追つかけるばかりであり、事実そのもののほとんど無差別に近いとりあげが、四十巻の結末をあのよう手をあげた形で、投げ出させていることができる。

かくして、「基本的な世界觀」の思想（因果観や政治道徳説）によつても『太平記』はその時代を十分にとらえきれなかつた(10)し、作者の立場も変化して「矛盾・不統一」をきたしたから、文学的な「失敗作」となつた(9)。しかし、『太平記』の評価はそれだけで尽くせない。文学的「失敗」の側面を敗北というなら、歴史文学としての「勝利の道」を歩んだ証拠もあげられたと述べた(6)。

そして、その「勝利」の論点を、さらに展開させて次のようにも論じている。

(11) このような失敗作たらしめた同じ根拠が、太平記をしてこの時代の他のいかなる作品よりも重みのあるものたらしめたものであり、その構想の敗北そのもののなかに、いわばあらたまのような底光りをうけとることが重要なことであろう。

「あらたまののような底光り」とは、この場合『太平記』の「批評精神」を指しているが、その精神こそが「太平記論の眼目」であると述べた。たとえば、『宮方深重』の立場が最も鮮明であるはずの巻十二に、建武中興政府に対する「仮借のない批判」がみられ、そうしたところに『太平記』が「まつとうな歴史文学」であるとの証拠があるし、それは「単なる倫理的な批判」を越えて「歴史批判」にまで進み、「古代的な天皇制政治の没落」と「その必然性をも」「浮かびあがらせ」るものになつてゐるといふ。

そして、その「批判精神は、人物像にもみることができる」として楠木正成に注目する。正成が「旧貴族の頽廢的な政治」と組んで活躍し、「絶賛され」るが、結局は「敗北せざるをえなかつた」人物として描かれたことは、旧貴族の「モラルそのもの」の「敗北」を語つたものである、と論じた。また、正成の最後を描く巻十六で、兵庫に下つたことを「哀れなりしこ」と同情的に語り、自害した正成を称賛していることについては、次のように評価する。

同情・絶賛にもかかわらず、彼の全行動およびそれによつてうち出された事件の全貌は、このような主従觀念としての封建的モラルが、もはや破綻し、時代のうつりとともに生氣を失いつつあることを明らかに物語るものとせざるをえない。

従来、正成の忠臣性を語る素材とされてきたその場面を、永積氏は

逆に、「封建的モラル」が「破綻」したと捉え、そこに『太平記』

作者の「批評精神」の発現を読みとったのである。

さらに、『太平記』の「批評精神」が「旧貴族的社会の秩序」に
対してだけでなく、「新興の武家勢力」にも働き、佐々木道誉・土
岐頼遠・高師直などの「おこれる者」への批判があるし、その現実
を「下剋上」として認めていることを次のように解釈した。

いわゆる下剋上の支配的な事実（中略）によつて、すでに新しい
秩序が芽生えはじめていることを、消極的にではあるが容認
するというところまで來て いる。

そして、その同じ視点から、細川頼之が管領職に就いて「中夏無為
の代」になり「めでたかりし」と述べた『太平記』の大尾の記事に
ついても、それが「古代的な天皇制政治」でも「足利将軍」でもな
く、「地方の大名」の細川頼之であつたところに、「太平記作者が
実質的には、すでに新しいモラルについて語りだす一步手前今まで
到達して」いることを「読みとることができる」と評価した。

こうして永積氏は、『太平記』にみられる「批評精神」の発現と
考えられるさまざまな表現をとらえて、文学的な可能性を認めたわ
けだが、つづいて、その「批評精神」の「限界性」について説いた。
たとえば、卷十四で、尊氏の謀反を知つて狼狽する朝廷の対応を
笑つた次のような狂歌を例にとりあげて検討する。

賢王の横言に成る世の中は上を下へぞ返したりける

かくばかりたらさせ給ふ縁言の汗の如になど流るらむ

すなわち、『太平記』は「衰弱した形ばかりの古代を、この程度に
まであざわらうことによって、美事に克服した」と評価しながら、

その「落首」の「限界性」を指摘して、次のように説いた。

あれもこれも批判し、冷ややかにあれこれの対象を笑殺するこ
とによつて批判の主体者がしばしば向きをかえ、その結果集中
的な批判、本来の批判精神のたかまりを十分に發揮できなかつ
た（中略）。自らの手によつて歴史を創り、その困難な事業の
扱い手としての役割から身をすらしたところに、眞の批判精神
は生まれることができない。

そして、そこに『太平記』の「批評精神」全体がもつ消極性が象徴
されていると論じた。

4

それにしても、永積氏はなぜこうも厳しく「破綻」や「限界性」
を説くのであろうか。それは「落首」にみられる「身をすらした」
ような「批判の消極性」が「太平記全巻」の「批評精神」に「共通
のもの」であり、「太平記における批判的なもの」は「落首的な批
判の限界を飛躍することはできなかつた」という氏の『太平記』論
の見通しと関係がある。さらにいえば、それは、

文学としての太平記が、その構想においておおいがたい破綻を
示したように、その批評精神のこのような分散は、けつして作
品太平記の芸術性を高めるものではなかつたことを認めなけれ
ばならぬ。

という、「構想」が「破綻」した『太平記』のその評価とつながつ
て いるのである。

最後に、永積氏は「太平記の表現」に及び、「批評精神」が「対
象と徹底的に対決」せず、「消極的な批評」や「客観主義」的な批

評に終わったことを、「表現の問題」としても考察しようとする。すなわち、『太平記』が現実を「きびしい眼」で観察し「叙述」したと認めながら、なお、「表現」においては、「形式的な対句的語法にたよらざるをえず」、「新しい表現を十分に確立し、和漢混淆文をさらに正當におしすすめるまでにいたらなかつた」として、太平記の文章は、作者の客觀主義的な精神の限界によつて、新しい芽生えを内にはらみながら、それを十分に成長させることができる、ほとんど形式的な調子のなかに逸脱させてしまった。と論じた。また、

平家物語の豊かで力強い文章と、太平記の形式的で変化に乏しい文章とを比較することによって、この二つの文章の相違を、

作者の精神の質の比較にまでもち来たらさないわけにはゆかない。

とも述べた。「表現」についてのこうした論評も、作者主体の「批評」の「消極性」や「客觀主義」と関係があり、ひいては、文学作品としての「構想」の「破綻」ともそれは関わっていると思われる。以上が、『続日本古典読本 太平記』の永積氏の論の要点である。

5

その後、永積氏は、「歴史文学の評価について——平家物語と太平

記——」(前掲)を書き、歴史文学としての『平家物語』と『太平記』をどう評価するかに焦点をあわせて、『続日本古典読本 太平記』の論を補強した。すなわち、「歴史文学の評価」としては、「何をいかに描き」、また、「描くことができたか」が問題であるという。『平家物語』は「治承・寿永の内乱期」を描き、「領主・武士階級を最大の人間像として」「中世革命の決定的な時期」の「もつとも典

型的な人間像」を「描きだすこと」に成功した」という。しかし、「元弘・建武の内乱期」を描いた『太平記』の時代は、その「領主階級」のあり方が変化した。つまり、「鎌倉政権の勝利とともに後退をはじめ、古代的な貴族たちと妥協をかさねて、しだいに歴史の主導的地位から没落し」た。それで、『太平記』が描く武士階級の人間像は、『平家物語』のような「かがやかしい英雄」ではなく、「批判の対象」となる「愚劣な人間」となつた。もつとも、『太平記』は下剋上の時代に活躍する「党・一揆」や「野伏・足軽」を描いているが、それは「物語をおしすすめる」「主導力」ではない。

そこに『太平記』が文学として『平家物語』と「同等に論じえない理由」があるとした。

そして、作者の立場や「構想」についても次のように再論した。すなわち、「卷」十一までの前半と、それ以後巻末までは、あきらかに立場のちがつた筆者が想定」でき、そのため、『太平記』は「文学的な完成度」において『平家物語』のような「密度と平衡」をもちえなかつた。したがつて、『太平記』は、

歴史文学・「軍記もの」の持たねばならなかつた英雄叙事詩としての形式を貫くことができず、したがつて『平家物語』がかかるとりえた健康なロマンティシズムの精神をも生み出すことが

できなかつた。

永積氏はさらに「文体」にも言及し、『太平記』の「単調な混淆文」は、『太平記』の「客觀主義」にみられる「文学的な主体の消極性」のあらわれであり、「説明的で平板な文章をさしまねいた」という。そして、それは、『太平記』の「批判精神の弱さ」そのものに基づくものであると論じた。つまり、永積氏はここでも、「鋭い批判精神」も「客觀主義の域を出」ず、「新時代の潮鳴」を「典型的なかたち

で「うちだすことができないまま、文学的には「挫折した作品として現象しないわけにはゆかなかつた」と述べ、『太平記』の評価を否定的に打ち出したのである。

以上、永積氏は、『続日本古典読本 太平記』と「歴史文学の評価について——平家物語と太平記——」において、『太平記』の「構想」や文学的な達成について、作者の「立場・構想・基本的な世界観・批評精神・表現」を論じ、『平家物語』との比較も行いつつその各論を編み上げ、一つの構造をもつた『太平記』論を提示した。そうした意味において、永積論は全く新しい『太平記』論であった。

1

『続日本古典読本 太平記』が提示し、「歴史文学の評価について——平家物語と太平記——」が補強した永積氏の『太平記』論の特徴は、第一に、それまでの研究史の論点を広く汲み上げて整理し、それを土台としたという意味で、総括的な『太平記』論であつたことである。第二は、『太平記』固有の生成過程の問題や、構想と思想・時代との関係の問題、さらに、この作品にみられる批評精神とその主体の問題、そして、表現の問題など、文学論的視点を広くバーチャルな作品を検討し、そこから『太平記』の文学的な仕組みと特徴をつかんで評価を決めていこうとする、構造的な論であつたことである。そして、第三に、その論の内容についてみれば、永積論は矛盾の相において『太平記』の文学的本質や諸側面を捉えたものであった。たとえば、作者の立場が移動したことによつて「構想」

に“矛盾”が生じたという。また、「基本的な世界観」を論じても、問題は、『太平記』がそうした「中世的な常識」を「つきぬけることができたか」どうかにあるとして、「常識」との葛藤という相に注目し、やはり“矛盾”を論点にした。あるいは、「批評精神」では、その“先進性”とともに“限界性”をも説き、“先進性”の中に文学的な達成を見る一方、「限界性」のなかに“課題”があったと説く。さらに、内容と形式についても、古い「封建的モラル」が「破綻」し、「新しいモラル」を語りだそうとする「一步手前まで」進んだとその“内容”を評価しながら、それを描く“形式”は『平家物語』の模倣であつたという。これも“矛盾”的な相で捉えた論であつた。そして、『太平記』の「文章」を論じても、一方では「新たな芽ばえ」を認めながら、他方では『太平記』がそれを成長させえず、「形式的」なものに流れたとして、そこでも矛盾をみる。

永積氏はすでに『封建制下の文学』(昭和21・7)を書いており、中世文学の本質を“矛盾の相”で捉えることを提示していたが、この『太平記』論も、そうした矛盾を論の焦点に据えて展開したといえるだろう。この永積論は、『太平記』が、半世紀の長きに及んで変転をくりかえしながら複雑に展開した動乱の時代を描写の対象にしたがゆえに、おそらくぶつからざるをえなかつたであろう複雑な問題——たとえば生成過程の問題などを内包していることを、矛盾の相を通して我々に深く教えてくれる。そして、それは永積氏が切り開いた『太平記』論の新しい地平であり、その意味でも永積論は戦後の『太平記』研究を出発させるにふさわしい論であつたといえるのである。

(八) 方深重のもの」の立場になると思われる卷十三から……。

しかし、作者の立場や構想に「矛盾・不統一」があり、文学的に「失敗作」であるが、失敗の同じ原因が、「歴史文学」としては貴重でもあつたと論ずることなど、永積氏の論そのものの中に「矛盾の相貌」があつたことは指摘しておかなければならぬ。永積氏は鋭い分析と構造的な論究によつて、「太平記」について厳しきるほどに文学としての「限界性」を強調し、構想の「破綻」と「失敗」を論じたわけだが、その論理が、永積論自身に矛盾を起していることもここでみておく必要がある。

永積氏の『太平記』論の骨格は、第一・二部の作者は「宮方深重」の立場にあり、第三部は武家方に心をよせる者の立場であるといふ理解が支えている。そのことは、たとえば、「太平記の成立について」検討した場面では、

a 第一部・第二部はそれがある時間をへだてて増補されたにしても、その立場は原則的には宮方に心をよせるもののそれであり、第三部の立場、すなわち足利・武家方に同感するに近い後半部の立場といつて対立的でさえある。

と述べている。また、「太平記の構想について」語る場面でも、四十巻本太平記の第一部および第二部の叙述は、ほぼ「宮方深重」すなわち公家方（特に南朝中心）の立場から、この時代をとりあげようとしたものであるといふことができる。

b 太平記の第一部ともいべき卷十二までが、宮方を指導者としていくとして、次のように論が展開する。

(b) 「宮方深重」の立場にたつ「太平記」作者は、卷十二「公家一統政道の事」で、「太平」の結論を見いだしている。
(c) しかし、卷十二が確認する「太平」は形式的なものであり、卷頭章段「公家一統政道の事」をも含む全巻にわたって、実現した「太平」（建武中興）の政治に対する痛烈な批判が描かれていることはいうまでもない。（中略）同じように「宮方深重」ながら、その卷十二の歴史叙述の性格については、「太平記」の批評精神について「論じた場面では、
c 卷十二の巻頭「公家一統政道の事」の最初に見られる「めでたき」公家政治への復帰の讃美歌が（中略）^(c) 形式的には莊重にうたわれているにもかかわらず、この一章ばかりでなく卷十二のすべてをひきくるめて、太平記がこの「めでたき建武中興」政治に対する痛烈な批判に終始していることは、ここにあらためて注目されていいだろう。

と観察している。そして、卷十二にみられるそうした歴史叙述の評価については、「太平記の構想について」の一節で、

d 太平記前半の構想が根本的には「宮方深重」の立場にありながら、個々の事件・個々の人物行動に対しても、宮方に対しても反省的であり、批判的でさえあることは、後半の増訂者の加筆の問題にもかかわるけれども、^(d) 歴史文学として、上にみた矛盾をきりぬけるための、敗北であると同時に勝利の道でもあつた。

と語っている。これらa～dにみられる永積氏の論について、卷十二に焦点をおいて考えてみたいが、論点をあらためて整理していくば、
(c) しかし、卷十二が確認する「太平」は形式的なものであり、卷頭章段「公家一統政道の事」をも含む全巻にわたって、実現した「太平」（建武中興）の政治に対する痛烈な批判が描かれている。

(d)

「痛烈に批判している」。

こうした描写の実態は、作者の立場と現実とが矛盾したことを語つており、その「矛盾をきりぬけるために」作者は、自らの立場と、そこに身をおく現実に対し「反省的」「批判的」になつた。

そのことは、「矛盾」につきあたつて、「矛盾をきりぬける」操作が必要であったという意味では、文学的な「敗北」であるが、「矛盾をきりぬけ」ようとして批判的な現実を捉えて描き得たという点では、文学的な「勝利」でもあつた。

ということであろう。ここで、永積氏がcで語つている卷十二の内容にあらためて注目してみたい。それは、永積氏が分析したように、卷十二の内容は卷頭の数行を除いて、全巻にわたつて、建武中興政府の政治について痛烈な批判を開拓し、その中興政府の現実を「太平」と称えることに不同意を表明していると思われるが、そのことは、永積氏自身も、次のように具体的に指摘している。すなわち、
① 「宮方として最も有力な大塔宮の行動が、まず不当な武人ぶりとしてとりあげられ」「単純な同感をもつて述べられることなく」「むしろ不可思議な異状なものとして語られている」。
② 中興政治の現実に対し「哀れ如何なる不思議も出で来て、武家四海の権を執る世の中にまた成れかしと思ふ人の多がりけり、という武家方の呪いにみちた意見が隠すところなく述べられる」。
③ 「腐敗のきわみに達した公卿たちの恩賞政策は」「收拾のつかぬ錯乱としてとらえられる」、等など。

④ 卷十二のはじめ、『太平記』の「前篇の焦点ともいべき『公家一統政道の事』」の一段にこれ以外、何の記事もないということをわれわれはもう一度注目すべきであろう」。
⑤ つづく「大内裏造営の事」で、中興政府の「政治的な腐敗」を

⑥ 「太平記」は、「これらの政治的な腐敗は、不当な恩賞をかちえた貴族たちの人間的な頽廢と結びつくことにより、救いがたい混乱をまきおこす」その「事実を『千種殿並びに文觀僧正奢侈の事』の段に」「中興政治の腐臭の如く放たざるをえなかつた典型的な人間堕落のかたちでおし出している」。

⑦ 「このよだな復古政治の頽廢がさしまねいた当然の結果としての諸国の離反・動乱に対しては」「妖氣払い・祈祷よりほかに何もなかつたことが、あからさまに述べられる」。

⑧ 「卷十二は最期に」「大塔宮の不当な武家ぶりと」奢り、淫樂を事とした行状と。「その武功を忘れて遠流に處した天皇の手落ちとしての処置が物語られることで、巻をとじている」。

整理すれば、右の八項に及ぶ内容を、永積氏自身が卷十二について確認しており、傍縁部cの叙述とともに、その分析は的確である。さて、永積氏がcとおさえた卷十二の内容及び①～⑧の記事構成から（現行四十巻本の）作者の立場を考えるなら、作者は「公家一統政道」（中興政治）が実現した卷十二に「太平の結論を見出し」たとはいえない。むしろ、①～⑧に現われた中興政治の実態に幻滅を感じ、そのことを率直に語りうる立場の者といふべきであろう。であれば、傍縁部bの認定は、『太平記』の叙述の実態とは齟齬しがけ離れていくことになる。そうであれば、そのbを前提にするがゆえにcをdと解釈したその理解も、変更を迫られることになると思うのである。

ところで、cの内容を、bを前提にしてdと解釈するその理解の構造の大前提になつてゐるのは、aの（第一・二部の作者の立場は「宮方深重」であるという）仮説であるが、bの認定も、dの解釈

も変更を迫られるとすれば、aの仮説そのものの妥当性についても再検討が迫られるのではないか。『続日本古典読本 太平記』が公表されてから、すでに半世紀が経過した。半世紀も前の永積論の、その各論の一いちについてここで論じようというのではない。ただ、永積氏の『太平記』論の構造が、aの仮説を前提にして論を出発させたことが、『太平記』の評価を「矛盾・不統」とか、文学的「失敗作」という方向に固定する傾向を生んだし、たとえば巻十二にみられるリアルな歴史叙述(①～⑧、c)を、一方では高く評価しながら、他方ではdのように、「矛盾をきりぬけるための」措置であつたとか、「敗北であると同時に勝利の道でもあつた」といった韜晦した評価の枠組みをつくりだす結果になつた、そうした関係を、永積論の構造上の問題点として認めておきたいと思う。

3

また、永積論の矛盾は、次のような点にも指摘できる。——例の、作者の立場が移動して「矛盾・不統」と構想が「破綻」が生じた、という問題であるが、——「基本的な世界観」を一貫してもちつづけるほどの作者主体が、歴史が展開して事態が変化したからといって、その主体的立場を宮方から武家方へと移動させて、事態の変化に対する対応するといったことがあるのだろうか。永積論の骨格に関わるこうした疑問は、その後、永積氏への批判として、桜井好朗や社本武らによって提示された。

それから、また、『太平記』評価の基準に『平家物語』を据え、『平家物語』に比べて『太平記』が劣るとした次のような永積論は、高木武・後藤丹治氏らの先行研究をふまえたものであつたが、黒田俊雄氏が根本的な疑問を提示した。永積氏の論は、

太平記が平家物語を先駆的な作品とし（中略）、平家物語をとにかく模倣したという事実は、もはや動かしがたいのである。（中略）平家物語に見られる首尾一貫した統一的な組織をそのまま模倣することができます、ほとんど失敗に近い構想のまま、あの厖大な長編を投げ出してしまつたところに、太平記の敗北がある。

というものであった。しかし、永積氏が『太平記』評価の起点として押し出したものは、「古代的な天皇制政治の没落」と「その必然性」を「浮かびあがらせ」、「時勢粋の底知れない力」を「生き生きとした現実の姿として」描きだした「まつとうな歴史文学」ということではなかつたか。

4

こうした問題点についてことさらここで述べるのは、われわれが永積論から何を学び、何を継承し発展させるべきかを、今後とも、さらに具体的に考えてみたいからであるが、永積氏は、その著述の中で、たとえば、次のようにいう。

e 「宮方深重のもの」の立場に立つと云われ、復古的な王政を礼賛したかのように宣伝されて来た太平記が、古代的な天皇制政治とその実質に対するむしろ批判の文章であつた。（中略）当時のあらゆる著名な文学が考えることもできなかつたことを太平記が果たした。

そして、これらのこととは「太平記の本質を語る」者が「見のがす」とのできぬ最も重要な問題であるとも説いていた。こうして『太平記』固有の文学的本質を指摘しながら、その評価については『平家物語』をほとんどの最高の基準としてもちだしたところに、議論の

余地が残されたのである。

戦前・戦中の『太平記』評価と『太平記』論に対して、永積氏が主張しようとした『太平記』の文学的本質が何であったのかは、こうした文章からも明らかになるわけだが、しかし、永積氏の『太平記』評価は、そうした質に必ずしも対応し、重なつてはいなかつた。

(注)

(1) 戰前・戦中の時期、『太平記』研究がおかれた状況について、たとえば、むしゃこうじ・みのる氏は「『太平記』と『平家物語』」「文学」(昭26)において次のように述べている。「建武の中興」という批判をさしはさむ余地のない「聖業」に関する「第一の古典としてたかめられるとともに、ざやくに歴史学からも文学史からも正当な批判の根拠がない」とさいえばわかれていつてしまひました】。

(2) その後の永積論については、別稿でふれる。

(3) 「詳解国語漢文叢書」の中の『詳解太平記』(中山久四郎監修、昭5・11) 中の「太平記解題」の一節。そこで取り上げられている『太平記』の章段記事を一覧しても戦前の『太平記』観の一端が了解できる。

(4) もちろん、三部構成説を唱えた尾上八郎の把握は、第一部は、後醍醐天皇の関東御誅伐の御企から、建武中興の成立までである。第二部は、尊氏の謀反から、義貞の戦死までである。第三部は、後村上天皇の御即位のあたりから、細川頼之が義滿を補佐するところまでであらう。

ということであり、天皇主義的な把握ではなかつたし、野村八良の

「太平記概説」でも、その捉え方に党派的な偏狭さはなかつた。しかし、永積氏が「俗論」と呼んだ戦前・戦中の多くの『太平記』理解は、皇国史觀のもと、天皇主義的な党派性が強く押し出されたものであつた。